

ウィリアム・アーヴィン著

## ウォルター・バジ ョ ッ ト (5)

訳 渡 辺 弘  
立 川 順 子

### 第 4 章 業 績 と 死

バジ ョ ッ トにとってその結婚は、ロンドンの上流階級の華やかな世界を公開してくれた。政治家と政府の機能についてのあの詳細な知識を彼が獲得したのは、ウィルソン氏との因縁を通してであり、それらの知識は『イギリス憲政論』と『自然科学と政治学』に新鮮さと精彩を与え、伝記と歴史に関する彼の研究の長いリストのまさに内容を形成した。オーグスティン・ビレル氏はバジ ョ ッ トの著作のもつ独特の長所は、体験主義的なバジ ョ ッ トの性質に起因すると述べた<sup>1)</sup>。それらはまたより幅広い世俗的な意味では、この時以後、彼が身につけ始めた豊富な経験の賜物でもある。クラヴァートン・マナーにあるウィルソン氏の邸宅の客たちには、政治家、銀行家、画家、音楽家、作家など、マシュー・アーノルドからバスのボウ・ナッシュ (Beau Nash) の継承者に至るまでの名士達が含まれていた。そしてこの華やかな世界でバジ ョ ッ トほどその場にふさわしいものはなかった。彼は芸術と科学の両方の分野で健全な教育を受けていた。彼は法律の勉強の全コースを終了していた。すでに政治、文学、政治経済についてのかかなりの権威であった。銀行家として多くの実際的体験も経てきていた。とりわけ彼は人間性についての鋭い洞察力をもった観察者であった。結婚を機にこのより広大な社会に入り込んだバジ ョ ッ トは、彼がピットについて述べているように「自分自身であることのこの上もない許可」を受け取った。結婚後数年してバジ ョ ッ トは義父を「厳格な重金主義者、熱烈な自由買

易論者」, 強力な「実務の想像力」と類稀な理解力をもった金融評論家と, 「シティー」の用語でもって描写した<sup>2)</sup>。バジョットは平凡な人間を巧みに解説する才能をもっていたが, ジェームス・ウィルソンはごく簡単に, 明晰な論理的精神, 強健な常識, 測り知れないエネルギーと暖かな情愛の持ち主と解説されている。スコットランドの小さな羊毛製造業者の息子であった彼は, 猛烈な労働と胸を引き裂くような波乱に富んだ人生のうちに立身出世して, 有力な国際法学者, 大臣になった。ジェームス・ウィルソンのように, 人間が情熱的にまた精力的に人生を送れるということは素晴らしいことであるが, 彼が余暇の合間に客をもてなし, 愛情深い父親であり得たということは, それ以上に素晴らしいことである。このヴィクトリア朝のヘラクレスと義理の息子の間には, 老人と風変りな人間の間にはめったに存在しがたいある親密さが育っていった。確かにウィルソンに関するバジョットの『回想』(“memoir”)は批判的であるが, その金融上のいかめしさとロンバード・ストリートの(ロンドンの金融界の: 訳註)専門語にもかかわらず, バジョットがこれまで書いたうちで最も暖かく, 共感に満ちた随筆の一つである。

彼はただちに政界に精通するようになり, 彼の義父の同僚の多くと——特にかつて自由党の大蔵大臣を勤め, 当時の全ての政治家のうちでバジョットが最もよく知り, 尊敬していたように思われるジョージ・コーンウォル・ルイス卿(George Cornwall Lewis)と親友になった。確かにウィルソン自身を除いて, たいそう冷静な批評家にこれほど称賛された公人は, 他にいない。その友情はユニークであった。ルイスが情味に乏しい平凡な人間であったために, バジョットが興味をそそられたのであるといっても過言でない。レスリー・スティーヴン卿(Leslie Stephen)は次のように述べている——「全く平凡, 頑固で, 功利主義的精神のまさに典型である, ジョージ・コーンウォル・ルイス以上に彼が尊敬した人物はいなかった。そして彼自身は想像力豊かで, 詩人ではないにしても, 大変, 並はずれた詩的感受性をもっていた」<sup>3)</sup>。クラフと同様, ルイスもバジョットの植物学上の友情で出来たグループに属していた。実際, これらの両者は正反対の事物について途方もない研究を構成したに違いない。後者は

偉大な精神の麻痺を、前者は限られた知性の円滑な能率を例証していた。クラフは真理の複雑さに困惑し、決して意見を公にしなかった。ルイスは「複雑化に対して耐久加工されて」(complication-proof)、おびただしい資料を渉猟し、殆ど全ての問題について明白で単純な意見をもった。ジョージ卿は「生来の飾らぬ真理への愛」を抱いていた<sup>4)</sup>。彼は常に正しく、殆ど常に退屈であった。要するに、彼は真理とは常に退屈であって、非常に退屈な人間によって最もうまく発見されるという、バジョットの好みの理論の輝ける見本であった。公正を心がけるなら、バジョットはルイスをあるがままに——つまり、立派な紳士、学識豊かな学者であり、慎重な政治家であると——評価していたと付け加えねばならない。そのような人物と全般的に公的な人間との間の友情がウィルソン氏の女婿にとっていかなる意味をもっていたであろうかは、彼の結婚直後に書かれたノートのメモが手がかりとなるであろう。「実際に政治の世界に住むことは、政治的な国で可能な最大の利益である。他人が間接的にのみ知ることを直接、知り得ること、つまり政界の様々な人物や働きを知ることは、他では得られないことである」<sup>5)</sup>

1860年、バジョットは国会議員に立候補し、ロンドン大学の議席を求めてジョン・ロミリー卿 (John Romilly) と4票差という接戦をした。百戦練磨の運動員であった義父の忠告と応援は、充分、その票差は覆したかもしれないが、ウィルソン氏は英国にはいなかった。1859年、彼は新たに創設されたインド議会の財務官の職を依嘱されていた。その申し出は東方の植民地で、回復不可能な混乱に陥っていた旧来の財政体系に代わって、全く新たな財政体系を築くようにとの招聘であった。政界における最高の任務が開始されつつあった時にそこを離れるのは気が進まなかったが、ウィルソンは受諾した。旧来の財政体系の驚くべき複雑さ、多様性、混乱はもとより、彼がインドで遭遇した、とてつもない困難、嫉妬深いイギリス人の役人や破廉恥な原地の商人達によってなされた様々な妨害、任務それ自体が大事業であること、インドの広大さ、無秩序、不案内から生じる種々の問題について私はここで適切に語ることは出来ない。彼は大変な気力でもってその大事業を行ったと言えれば充分であろう。1860年7

月4日、彼は独特の簡潔さで次のように書いている——

新たな活動の場に移り、日常とりかこまれている大なり小なりの些細な取りきめの気遣いを全て投げ捨てて、そのような特別の任務に全身全霊を注ぎ、特にそれを遂行する能力があると確信しているときの心の圧迫感がいかなるものであるか、貴君には思い及ばぬであろう。最大で最も重大な問題を決定する際に、英国と比較して此の地ではいかに易々と行かせるかを伝えることも不可能だ。実際的な力行使すればするほど、節度、配慮、慎重さに対する傾向が一段と強くなるのが確かに感じられる<sup>9)</sup>

赴任して最初の数ヶ月間、ウィルソン氏は彼自らが背おった重荷を殆ど感じていないかのようにみえたが、カルカッタの雨期の始まりのときから、彼の健康は衰え始めた。もっとよい気候のところへしばらく転地するよう警告を受けたが、彼は拒否した。彼の行おうとする改革は、まだ満足に軌道に乗っていなかった。彼は急速に衰弱し、1861年7月11日、他界した。心は最後まで彼が命を犠牲にしていたその大事業のことでいっぱいであった。インド議会におけるその空席をバジヨットに埋めてほしいとの申し出があった。健康であればそれを受諾することは、殆ど確実に輝かしい政治的経歴を意味したであろうが、病弱な人間にとっては、大変な危険を伴ったであろう。それはロンドンにおける羨望の的となるような地位を断念すること、そして恐らく彼にはもっと重大に思われたところの母親との別離を必要としたであろう。バジヨットは躊躇することなく、その申し出を拒絶した。ウィルソンの死とともにこの拒絶はバジヨットの経歴におけるターニング・ポイント（分岐点）を印している。もし彼の岳父が存命していたら、バジヨットは確かに現実の彼よりももっと政治家の部分が大きかったであろうし、著述家としての側面は減少していたであろう。

しばらくの間、実際『エコノミスト』誌の編集者であったバジヨットは、今や肩書きが経営者兼編集者となり、同時にスタッキー銀行ロンドン支店の監事役に任命された。かくして彼が英国において安楽にとって必要であると感じていた「確固とした地位」を獲得した。しばらくはその地位はさらに重要な名誉によって拡大されるかもしれないということがありうるように思われた。更に

三たび、彼は議会における議席を求めて1865年はマンチェスター、1866年にはブリッジウォーター、1867年はロンドン大学の各選挙区に立候補した。全ての試みに彼は成功しなかった。彼の失敗は皮肉的であった。彼と代議士の地位との間には、多くの騒々しい政治家達や鈍感な田舎の紳士が楽々と手に入れたもののみが立ちほだかっていた。有権者達にとっては未知で、見たところ彼らに印象を与えることが出来ないようであったが、彼はそれにもかかわらず、当時の最も名立たる政治家達に大いに尊敬され、称賛されて議会に求められた。生涯の後半をずっと「一種の大蔵大臣補佐」と呼ばれたほどに「彼に相談をもちかける大臣や各省の事務官達の影の相談役」<sup>7)</sup>として活躍した。選挙に立候補するためにマンチェスターに旅したとき、彼はグラッドストーンからの推薦状を携帯していた。それには次のように書かれていた――

経済学についての十分な知識、広範にして正確な学識、迅速、実際的な実務の気質と調停的性質がこれら重大な国益の代表としての人間にふさわしいものであるなら、貴兄の適格性は確かに異論の余地なく第一級のものであるに相違ないと思われる<sup>8)</sup>。

更にバジヨットの逝去の際に、彼は以下のように記した――

私が大蔵大臣を勤めていた間、金融、通貨に関する全ての問題に関してしばしば自由に意見を交換する機会があった。私のこれまでの経験上、この重要な分野においてこれ以上のことを期待出来、その広範な知識と成熟した思慮による意見交換において、これほど気さくで懇切丁寧な人間を私はいまだかつて知らないほどだ<sup>9)</sup>。

バジヨットが議席を獲得しようと試みて、何度も失敗したことは、彼の友人達を大いに当惑させた。自分は「政治の世界においてどっちつかずでいた」(between sizes in politics) というのが、彼の解説である。そして名目上は自由党员であるが、心情的にはあいまいで、情緒的なグラッドストーンの樂觀主義には賛成出来ず、彼はむしろパークのように、原則においては保守的で、運用面においては自由主義者であることを選択したのは事実である。しかしながら、伝統的に中庸を保つ人間がイギリスの有権者に受け入れられ、謹厳な代議士で

あることは、欺瞞が通用し、変節が罰せられない職業においては殆ど不必要である。彼は恐らく無意識に自分自身に判決を下していたのであろう。政治家にとって最大の障害とは、利口さと獨創性であり、それらは必らず大衆の心の中に疑惑と不信をめざめさせるものであると、バジヨットは何度も文章の中で言明している。これらの性質がなかったなら、ディズレーリとロウ (Lowe) は後半生において成功していたであろう。バジヨットにおいてもその欠点は少なくとも同程度に深刻であった。何故なら彼は様々な觀念にあふれていただけでなく、無害で単純な觀念を意表をつく皮肉めいた言葉で表現したからである。これほど健全な著述家が、これほど多くの逆説に熱申したことはなかった。『エコノミスト』誌で彼は莊重で單調な文体を開拓したが——それらは大成功を修め——個人的交際の白熱状態においては、賢い人間は自分自身の利益のためにとってすらもその賢さを隠すのに大いに困難を感じるものであり、とりわけ彼らは愚鈍な人間を困惑させ、煙にまくことを慎めないものである。

實際、バジヨットは資質によると同様に、気性と信念の上からも貴族的な人間であった。ピットに関する評論は、多くの自伝を含んでいると、バリントン夫人が我々に教えてくれる。そして確かに両者には共通の早熟性、幼時からの自信、共通の機敏さ、強固な常識、優れた記憶力、高潔な名誉の觀念と精神の鋭敏な純粹性がみられた。恐らく、より民主的時代に生きていたら、ピットは街頭で庶民を甘言で騙したり、媚へつらうことに没頭することは出来なかったであろう。バジヨットはまた不幸にも、あの大トーリー党特有の厳格な態度をいくらか身につけていた。耳に心地よい絵空事を、おびたしい数の他人に語る事の中に存する類の社交は、彼をすっかり疲労困憊させた。彼は金銭による賄賂と同様、微笑による買収も出来なかった。ある種の気分の中で、彼もまた「右も左も見ずに歩き、一人の男に話しかけるくらいなら、彼を枢密顧問官にした方がましであった」<sup>9)</sup>。このような事柄を知れば、彼が何故、選挙運動に身を投ずるのを困難に思ったか、何故、「有権者に対する彼の態度には、紛れもなく忍び寄って、競争になったときに熱狂を鈍らせがちになる冷笑主義の片鱗がみられる」<sup>10)</sup>かの理由が理解出来る。

バジョットは美声という明白な利点をもたなかった。彼の妻は彼が決して雄弁家ではないということを認め、ハットンも友への友情からあいまいにではあるが、「彼は演説家として成功しないときがしばしばあった。彼の声は音域が広くなく、態度は普通の聴衆にとって幾分、奇妙であった。」<sup>11)</sup>と所感を述べている。彼は偉大な政治家になるための特質を全てもっていたが、普通の政治家になるためのたった一つの特質を欠いていた。彼は知識、洞察力、それに天分をもっていたが、ただ力強さ、声、それに堂々とした態度が欠けていた<sup>12)</sup>。

1867年の病気以後、バジョットは熟慮の末、議員になるという野心を全く断念した。「彼の政治的判断は、より静かな生活のおかげで健康がすぐれると同じく、いっそう健全なものになったと確信している」<sup>13)</sup>とハットンは語っている。彼は決して議席を獲得することを本当に望んでいたのではなく、主に母親を満足させるために、そうしたのであったと、バリントン夫人は明言している。個人的意見としては、かくも実際的で分別のある人間は、それほど従順な息子ではありえなかったであろうと思う。バジョット自らは、『国会議員になることの利益と不利益』(“The Advantages and Disadvantages of Becoming a Member of Parliament”) について書き、その中で議員は地位、ある種の権力、政治の裏面について大いに知りうる可能性を得るが、大変な肉体的緊張を体験し、非常に退屈な議論に耳を傾け、有権者の心の生気のない平凡さに自らの考えを引下げるといふ犠牲を払うのであると断定している<sup>14)</sup>。バジョットは議員になるという4回の試みのうち3回を、彼が政治と公務についての長文の著作を書き始めているときに行った。彼は主として議員職がもたらすであろう知識と経験のためにそれを望んだとも考えられる。それが彼の健康にふりかかるであろう代価を恐れて、後に断念したのであるということがありうるように。1864年、バジョットは政治経済クラブ (Political Economy Club) の会員となった。記録によれば、それは1820年の有名なロンドン商人の請願によって公にされ、トウーク氏によって起草された自由貿易の原則を擁護するために、主として F. R. S. の故トマス・トウーク (Thomas Tooke) の尽力により、1821年、ロンドンに創設されたものであった。その記録はまた次のように述べている——「当クラ

づは初期において主として実業家から構成されていた。次第に、政治、公務に従事する者、文学者、法律家、経済学の専門家などが参加するようになった」。バジヨットが入会していた当時は、その定員は35名に限定されていた。会員でもあったペンウィスのコートニー卿 (Courtney) は、これらの会合に現われたときのバジヨットについて興味深い描写をしている——

私はバジヨット氏という名の、より厳格な経済学者のことを回想している。我々は金曜の夕方、会合をもっていたがその時分は『エコノミスト』の編集者にとっては不都合な頃であったにもかかわらず、彼は出来る限り出席し、常に歓迎される論客であった。彼はあまりにもしばしば弱点をさらすことがあったので、第二の種族の違い、区別を考えさせられたとあえて述べても、彼の著作の読者は全てその批判を受け入れずとも、理解できるであろう。彼の話し方は、性格そのままに気むずかしく、神経質であったが、議論における仲裁は、常に活気づかせ、納得のいくものであった。<sup>15)</sup>

著述家としてのバジヨットに関する批評のいかなるものも、これ以上に不当なものはありませんであろう。コートニー卿はバジヨットの著作を殆ど読んだことがないか、あまりにも多く彼の演説を聞きすぎたかのいずれかである。いずれにせよ、演説者としてのバジヨットの性格は、これ以上の注釈を必要としない。

バジヨットが会員となった最も興味をそそられるグループは、恐らく、形而上学会 (the Metaphysical Society) であろう。その学会は非常に激しやすい人物たちを、友愛の目的のために結合したのであった。ホーラム・テニソン (Holham Tennyson) によれば、その創設者であるテニソン卿 (Tennyson)、ジェームス・ノールズ (James Knowles) とデヴィッド・プリチャード (David Prichard) は「神学派と不可知論派がお互に示した軽蔑を嘆き悲しみ、友好的な関係における会合は、論争における寛容の精神と相互尊重の涵養のみならず、新しい教義の自由討議と誤解の解消にとって大いに有益であろうと考えた」<sup>16)</sup>。ジェームス・ドラモンド (James Drummond) の著した『ジェームス・マルティノウの生涯と書簡』(Life and Letters of James Martineau) は、その学会の会合についての興味深い記述を提供している。



会合は初めウィリス・ルームズにおいて開かれていたが、後にはグロスベナー・ホテルで開かれた。共に食事をした後、会員達は各自の前に1枚のフルスキヤップ判の用紙が置かれたテーブルの周りに坐った。その紙はしばしばメモ用としてではなく、時々、別の目的のために使用された……………討論は大いに感興をそそるだけでなく、たいそう異ったタイプの才能と多様な顔の表情をもっている、幾人かの非常に天分に恵まれた学究たちの見せ場は、それ自体、なかなか豪華なごちそうであった。終盤近くなると討論はしばしば雑談に移り、中でも卓越した人が目下の会員と自由に意見を交換しているときのなごやかな雰囲気は、現代において我々は幾分、古代アテネの様式で理性の祝宴を楽しんでいるという幻想を連想させた<sup>17)</sup>。

1870年12月13日、バジョットは『確信の感情について』(“On the Emotion of Conviction”)という論文を発表した。それはバリントン夫人による彼の著作集の中に含まれている。正反対の意見をもつ男たちが呉越同舟するときの、信ずることの心理についてバジョットが論じたのは、いかにも彼らしいことだ。別のこのような機会について描写しつつ、ハットンはラスキン(Ruskin)が外的現実に対してあまりにも子供じみた驚きの態度をとったことに対して、バジョットがユーモラスに叱責したと述べている。

結婚後、バジョットは優雅に読書をし、洗練された著作を発表する時間を殆どもてなくなった。それに続く6年間、彼はたった5編の文芸批評を著わしただけで、それ以後は全く発表しなかった。実業と政治の世界に生き、『エコノミスト』誌のために少なくとも毎週、2編の評論を書いたために、急速に幾分、ジャーナリスティックな文体になり、それは政治学や経済学に関する、いくつかの大著の中にもその痕跡を残している。これらのうちの最初のものは、『イギリス憲政論』で、この著作は当時、ジョージ・ルイス氏(George Lewes)によって編集されていた『フォートナイトリー・レビュー』に、1865年5月15日から1867年1月1日まで連載された。それは政治家や学者の間で、ただちに成功を修めた。バリントン夫人は当時、もしくはバジョットの死後2、3年して書かれたブライス卿、ゴッシュェン卿(Goschen)、ロバート・モリアー卿(Robert Morier)その他による賛辞を引用している<sup>19)</sup>。この書はただちにドイツ語、フランス語、イタリア語に翻訳され、永続的な学問上の価値の究極の榮譽として、

オックスフォードおよび北アメリカのいくつかの大学の教科書に採択された。それはいくつかの重要な憲政上の変化にもかかわらず、イギリス政府に関する最も一般的な論説としての地位を保持してきた。

『イギリス憲政論』を完成後、バジヨットは即座に『自然科学と政治学』に着手し、その第1章は1867年11月1日の『フォートナイトリー・レビュー』に掲載された。この著作もまた同時代の人々に好意的に受け入れられた。「貴殿の『自然科学と政治学』、ご惠贈いただき、誠に有難く存じます」とヘンリー・メーン卿 (Henry Maine) は書いている。「それはまるで旧友のようなもので、初めて世に出たときのその評論ほど強く私の心を打ったものはありませんでした」<sup>19)</sup>。数年後に、ハットンは『ナショナル・バイオグラフィー辞典』(Dictionary of National Biography) の中で、「『自然科学と政治学』は……インターナショナル・サイエンティフィック・シリーズの一つで、4版を重ね、67ヵ国語に翻訳されてきた」と明言している。現代の社会学者である、ハリー・バーンズ (Harry Barnes) は、近年の意見を次のように述べている——「バジヨットの『自然科学と政治学』は、今も変わらず貴重である。何故なら、彼は時間が何ら物理的方法で変える可能性のない、集団行動という根本的な心理学の基礎を扱っているからである」<sup>20)</sup>。

この時期は、彼の生涯で最も活発で、生産的な時期であった。編集の勤めと『エコノミスト』誌への週に2編の記事の準備の他に、彼はしばしば他の雑誌に寄稿し、『ナショナル・レビュー』誌の共同編集を行い、3年の間に2冊の書物を著わした。それらは共に幅広い知識、細心の思考と苦しい創作を要求するものであった。彼はスタッキー銀行の取締役兼副頭取、そのロンドン支店の監事役を勤め、しばしば政府の財政顧問としても活躍した。2週間ごとにハーズ・ヒルの両親を訪問し、地方の種々の事柄にも関心を持ち続け、晩年は自治体の裁判官代理であった。1861年以来、サマセット郡の治安判事を勤め、定期的に小治安裁判法廷 (陪審なしに治安判事によって開かれ、軽微な事件を扱う：訳註) に通った。このような種々雑多な義務もまた、かなりの時間を家族に献げる妨げとはならなかった。彼は義妹たちと公園で乗馬を楽しみ、殆ど毎日、妻と四輪

馬車に乗り、彼女とヨーロッパ大陸で大規模な休暇を過ごした。彼の義理の母やその未婚の娘達と共に、彼はベルグレーヴ・ストリートに大きな屋敷をもち、そこではパーティーや舞踏会が絶えず開かれていた。グラッドストーンの催す政治家達の朝食会から、パルマーston夫人 (Palmerston) の手の込んだパーティーに至るまで、ロンドンの上流社交界の多くの活動に加わるだけでなく、これらのものにも彼は参加した。恐らく、敏速、有効、多様な知性に最終的に付随するものは、精神の自然な落ち着きと平静さであろう。いずれにしても、バジョットはそのような落ち着きを所有していたようだ。彼は仕事を中断させられることを迷惑がったことは、一度もないようであった。家族の誰かがある問題に直面したときはいつでも、最初に思いつくことは、書斎にいるウォルターを捜し出すことであった。彼にはいつも親切丁寧に相談を受けるための時間が充分にあった。彼は道理と良識を伝搬し、たとえ一家水入らずのときも、他人のプライバシーの尊厳に対する細心の紳士の配慮を示したが、重要なビジネス、家庭内の取り決め、夫婦財産契約は、どういうわけかいつの間にか彼の掌中に委ねられた。彼の様々な活動に関する評論は、もう一つの重要な特性を明らかにしている。彼は新しい関心事を受容したと同時に、古い関心事にも固執した。自らの過去について保守主義者である彼は、古くからの観念、昔ながらの地方色、旧友を愛した。彼のハットンとの友情は、アリストテレスの原則に対する固執と同様に永続的であり、ロンドン生活の中にあってもラングポートとの結びつきを保ったことは、政治学、経済学を研究中にも文学を楽しんだことと同じく確かなものであった。しかし同様に特徴的なのは、彼が晩年に示した新たな研究、例えば地質学や生物学に対する生き生きとした関心であった。更に、バリントン夫人は我々に彼が死ぬ直前に、これまで常に嫌悪していた音楽に対してある好奇心を感じてすらいたと伝えている。そのような人間にとって年をとるということは、幅広い人間に成長することでもあるのだ。

バジョットは体力の充実を長く享受することは出来なかった。1867年、42歳のとき彼は大病、すなわち様々の内臓器官の炎症を経験した。そしてそれらの影響から完全に回復することはなかった。その後すぐに、『エコノミスト』誌の

編集助手を見つけねばならず、ロバート・ジフェン (Robert Giffen)、後のジフェン卿を招用した。彼の次の大著、『ロンバード街』(*Lombard Street*)もまたじっくりと時間をかけて書かれ、1873年の出版まで丸3年が費された。確かにこの書は入念に改訂されたが、入念で懸念に満ちた改訂は時には筆力の衰退を示すことがある。とにかくも本書は特に政治家や実務家達の間で、たちまち認められた。著者を祝福する際に、グラッドストーンは「その明晰さを称えるべきかその活力を称えるべきか」迷った。時の経済学者、W.S. ジェヴェンス (W.S. Jevens) はバジヨットに次のように書き送った——「私の判断しうる限りでは、それは我が国の銀行体系の仕組みに関する傑出した評論である」<sup>22)</sup>。ヨハン・プレンジ (Johann Plenge) はドイツ語版の序文に次のように明言した——「1837年に出版された『ロンバード街』は、大国の金融市場の実際と構造についての古典的書物である」<sup>23)</sup>。

バジヨットの最後の著作、『経済学研究』(*Economic Studies*)は未完に終わった。それは3巻から成り、第1巻と第3巻は政治経済学自体を、第2巻は著名な経済学者達を扱う予定であった。『フォートナイトリー・レビュー』誌の1月号と2月号に印刷された第1巻の連載2回分と、2, 3の伝記的随筆のみが書かれただけであった。ロバート・ジフェン卿は『経済学研究』に非常に絶賛を与えており、それらを「未完成にもかかわらず、バジヨットが残したうちで最も重要な著作」<sup>24)</sup>と称している。バリントン夫人も科学者のフランシス・ガルトン卿 (Francis Galton) や長く自由党の植民省大臣を勤めたグランヴィル卿 (Granville) からの賛辞を引用している<sup>25)</sup>。しかし、概して『経済学研究』は未完成で終わったために、バジヨットの他の大作ほど注目を集めなかったように思われる。

1875年4月13日、バジヨットはアシーニウム (Athenaeum) の会員に選ばれたために、正式に名士の仲間入りをした。そのクラブは当時、「科学あるいは文芸上の才能で世人に知られる人々、美術において卓越した芸術家、科学、文学、美術の惜しげない後援者として著名な貴族や紳士方」<sup>26)</sup>の集まる一種の地上のヴァルハラ(北欧神話で、知識、文化、軍事をつかさどる最高神、オーディンの殿堂：訳註)

であった。バジヨットのいくつかの興味深い一面が、当時の名士達の著述物の中に窺える。『回想』の中でモーリー卿 (Morley) は、バジヨットよりもむしろ自らの人となりをもっと鮮明に明らかにしているが、彼はバジヨットについてこう語っている——

公的事柄においては彼は年下の人間の考え方や目標を実際に共有することはなかったが、自分よりも熱心な友人達には、大いに関心をもった。彼の気の良い反語的表現は、彼らを激励したものだ。……………たびたび私は彼に思いきってこう言ったものだった「あなたには欠点が1つだけある。つまりあなたは自由の原則のもつ固有の力と栄光を感じていない」。このことにもかわからず、時事問題で彼のソクラテスの異議提出にどれほど賛成していたかは、十分に気づいていた。そして人間と実務に関する現実的な知識の全て、真面目な判断と興味、誠実な共感と友情、これらは全て彼の陽気でぴりとしたユーモアの底に存在していた<sup>27)</sup>。

ブライス卿はよりいっそう賛辞を呈している——

我々は何人かは70年代を回顧して、彼はロンドン中で会って一番楽しい人間で、彼の会話は才気と刺激にあふれていたとよく思ったものだ。それは常に会話であって、決して演説や講演ではなかった。彼は話すだけでなく、人の話に耳を傾けることが出来た。彼は自らを対話の相手のレベルに置いてあなたが彼の優越性をどれほど感じようとも、彼は常に与えると同じように受け取り、自分自身の知識の宝庫から思想を運んでくるのと同じく、他人から思想を引き出しているようにみえた。しかしバジヨットは常に快活、自然でありのまま、気どらない人間であった。彼は真理を追い求めているように感じられ、あなたもその追求の仲間に入れてもらえたような感じを味わうことが出来た<sup>28)</sup>。

長談義はバジヨットが決して出来なかったものであったと、バリントン夫人は認めている。彼女の正しさを証明するものは、数多くある。長談義というのは、書物の恵み深い沈黙の中に注ぎこむことは可能であるが、決して語られるべきではないし、まためったに傾聴すべきものでもない。詐欺的な政治家達の次に、バジヨットは冗舌家を嫌った。もし彼がクラブ・ロビンソンのことを友情甲斐もなく冷淡に書いて、ゲーテやワーズワースの友人である男 (ロビンソンのこと: 訳註) は薄情にも多弁であった——それはバジヨットがしばしばふざ

けて利用したが、それでも迷惑をこうむったように思われる特性であった——という説明は疑いもないものであった。彼は『ハートリー・コールリッジ』(“Hartley Coleridge”)の中で称賛すべき力強さでもって 次のように明言している——

実際のところ、ありふれたことを長々としゃべりまくるという習慣は、精神の欠陥の1つの徴候である。それは他人の心のうちに何が起りつつあるかということに対する無知から生ずるものである。S・T・コールリッジ (S・T・Coleridge) は誰にでも話しかけ、誰にでも同様に語ったということは、よく知られている。キリスト教の聖職者のように、彼は他人のことを顧慮しなかった。「素晴らしいオペラですね、コールリッジさん」と50年ほど前にある若い婦人が述べた。「おっしゃる通りです、奥様。そのうえ『ご承知』のようにカントがどこかで哲学上の無限の観念に対して同様のことを表明しているのを私は思い出します……………」<sup>29)</sup>。

更に、バジレットは次のページの大部分を通して、二世代のコールリッジを酷評し続けている。バジレットはくろうと受けする機知や、殺害を犯すときのよう  
に冷酷に警句を思いめぐらすことに熱中している男とは無縁であった。「ユーモアは絶えず心の中に抑えておくことで、大いに引き立つものである」と彼は主張し、ピットの場合と同じく、多くの偶然的な出会いのもつ重苦しい憂うつに対する、優美な構造の鎧兜として働いたに相違ない、ある種の慎しや深さをもっていた<sup>29)</sup>。そして事実、ユーモリストではあったが、彼は決して健全で真面目な会話の敵ではなかった。T・スミス・オスラー (T. Smith Osler) は「真理に到達する手段として、バジレットとの会話以上のものを私はこれまで知らなかった」<sup>30)</sup>と語っている。彼は他人のほのめかしたことをいかに発展させるか、いかにして明確な目標に向けて議論を押し進めるか、そしてとりわけ「いさかいなしに活気」<sup>30)</sup>を持続するにはどうすべきかを心得ていた。露骨ないさかいを彼は特に嫌った。彼は争いよりも真理を好み、ソクラテスのようにいくらユーモリストで社会実験家であったので、誤りという器の中で真理を探求することを楽しんだ。彼は自らの無知を公言することで、愚かと思われるほど他人を得意がらせ、皮肉っぽい質問で彼らにショックを与え、狼狽させ、教え導くことを愛した。「どうしてもその問題が気になります。どのように考えるべ

きなのか、どうか教えて下さい。』<sup>30)</sup>と彼はたいそう無邪気に口を開いたものであった。「分別のある話が出来た人のことなど聞きたくもない。誰でも分別くさい話は出来るのだから。ナンセンスな話を誰でも出来ようか』<sup>31)</sup>とピットが語ったと伝えられている。鑑識眼のある聴衆の前で、バジヨットはピットのようにすばらしくナンセンスな話をする事が出来、ピットのように彼はナンセンスを最も知的な友人達のためにとっておいた。親しい友人達がたびたび出席した家族の朝食会の間、彼はベルグレーヴ・ストリートにある自宅のダイニング・ルームをあちこちゆつくり歩き、頭にひらめいた考えを全て、彼独特の少年のようなかん高い声で口に出したものであった。グラッドストーン風の堅固しい朝食会ですらも、この早朝の靈感をすっかり鈍らせてしまうことはなかった。

私がバジヨット氏にお会いして話しかけた唯一のときは、(1905年、ヘレン・グラッドストーン嬢 (Helen Gladstone) は書いている) カールトン・ハウス・テラス11番地で私の父が木曜日に開くある日の朝食会に彼がいらしたずっと昔のことだったと思います……………私の記憶に残っていることはただ一つ、彼が私達に話して下さった次のようなことだけです——くるみは割られようとするときどんな気持がするか彼には分かるのだそうです。と申しますのは、彼はかって馬車置き場と街灯の間に頭をはさまれたことがあったからなのです<sup>32)</sup>。

この時代における彼の主要な友人達の一人は、いくつかの保守党内閣の良心的議員で、何度も辞職を経験したカーナヴォン卿 (Carnavon) であった。彼はあの真面目な政治家と、洗練された紳士の見事な結合を示す貴族で、それはバジヨットと大いに気性が合うものであった。伯爵の壮麗な別荘のあるハイクレアで、バジヨットは自分自身の固苦しい世界におけるよりもっと多様な人々と出会った。最初の訪問の後、彼は手紙に次のように記している——

私はカーナヴォン卿の屋敷のあるハイクレアに行って来たところです。彼は私の敬愛する人々のうちの一人で、すぐに強い印象を残し、歓楽好きの人々が滞在している間、屋敷をもっと上品でまともに保つ手助けをしてほしいと申しました。そのときはカーナヴォン卿、アシュレー夫人 (Ashley)、スタンホープ卿 (Stanhope) (カーナヴォン卿夫人の兄)、ドロシー・ネヴィル夫人 (Dorothy Neville) —— 年若い夫と数の息子たちのいる美貌の女性と数人の若い男性が居合わせました。ご

婦人方が美しいドレスを身にまとい、我々はトランプで大ばくちを打ちました。いつもは夕方、時には朝（少くとも何人かの人々は、朝トランプ遊びをしました）私は、分別を働かせて、そのようなことはしませんでしたが。カーナヴォン卿はトーリー党が政権を取ったら、植民地の國務大臣になられるでしょう。カーナヴォン夫人は大変聡明で、文学の素養がおありです——少くとも文学を「いくらかかじって」おられます。彼らはこれから数年間『人気者』となるでしょう、何故なら彼らは共に賢明で、野心家でロンドンの近くに客をもてなすための美しい邸宅をもっているからです<sup>32)</sup>。

日曜日には彼はたびたびカーナヴォン卿夫妻と昼食を共にした。彼の午後の過ごし方は、特徴があった。隔週ごとに彼は最も敬意を表すべき福音主義の代表であるレイノルズ叔父 (Reynolds) と、最も悪名高きドイツ哲学の代表者で、その道徳的立場に対してレイノルズ叔父が最大級の不信を抱いたにちがいないサークル（「ウエスト・ミンスター評論」：訳註）のメンバーであったジョージ・エリオット (George Eliot) を訪ねたものであった。恐らく最も特徴的なのは、どちらかの訪問を彼はいっそう楽しく思ったかを述べるのが困難なことであろう。ジョージ・エリオットを彼は大いに称賛し、彼女を愛想がいいだけでなく、心理学の興味深い研究対象であるが、普通の世間の人々にはあまりに大物で重量感がありすぎると考えた。それで「世間のささやかな娯楽に関しては、ややなじみがない」<sup>33)</sup> とバリントン夫人は付け加えている。1874年、バリントン夫人はこう語っている——

バジョット夫妻はロンドンで家を買うことを決定し、クイーンズ・ゲイト・ブレース 8番地に居を構えました。そして家具類の設備と装飾をウィリアム・モリス (William Morris) の商会に委託したのです。ド・モーガン (De Morgan) のタイトルは勿論、装飾の特色となりました。

ウォルターは私に次のような手紙をくれました——「ワードルが家の大部分を行っていますが、あの大した男、ウィリアム・モリス自らが、頌詩 (Ode) を作るように客間を創っています」。ウォルターは壁紙やタイルを選ぶときに、ブルームズベリーの倉庫でウィリアム・モリスと時々会って、二人は家具類のことだけでなく、詩についても語り合いました。ウォルターはその風変りな結びつきと趣味の問題全てに対するウィリアム・モリスの独裁者的態度に微笑笑を誘われました。どれほど美学に関する教養談義が楽しいものであっても、それらのことはウォルターの



乳離れをさせることは出来ませんでした。彼はいつも子供達のことが大変好きでした。モリス商会が新居の大きな特色として扱っていた奥の広間の特に念を入れたデザインの中に、よくあるように色や彫刻が粗末ですけれども、大きくて立派な揺り木馬がありました。それは私の息子への姉からの贈り物でした。ある日、私達がそこを通り過ぎていると、ウォルターがいつもするように突然、全力で疾走してきて、「本当に」その通りなことを叫んだのです。「『あれ』はこの家の中で最高のものだ」<sup>32)</sup>。

バジョットは「いくつかの色やデザインの道徳性と不道徳性に関するモリスの見解を、徹に入り細に入り説明しながら、友人達を家じゅう案内してまわるのを楽しみにしていました。詩人(モリスのこと：訳註)は客間のカーテンや家具のために特別製の美しい青のダマスク織りにした絹を創作中でありました」<sup>33)</sup>。その仕事は骨の折れるものであったらしい。というのは、バジョットは2、3ヵ月ごとに糸の見本を受け取っていたが、カーテンはまだであった。

事実、彼はこれらのカーテンを一度も見ることがなかった。気管支炎の発作はいっそうひどくなり、心臓病の併発により危険が倍加された。1877年3月、新居における初めての冬の終わりに、彼はひどい風邪にかかり、ますます悪化しているにもかかわらず、それに対して彼は何の用心もしなかった。ある日、彼は『エコノミスト』誌のスタッフの一人に、自分は回復することはないと思うと告げた。その後まもなくして、ある晩彼はベッドを離れて書齋に上り、遺言をしたためた。3月20日に妻を伴ってハーズ・ヒルに向った。——それはこのような状況のもとでは、きわめて無謀な旅であった。医者が使わされ、右肺が充血しているのが発見された。バジョットの病状は日増に悪化したが、24日には幾分、持ち直した。彼の妻が朝じゅうずっとかたわらに付き添っていた。

『ロブ・ロイ』(Rob Roy)(スコット作・1818年：訳註)の新版のページを切り開きながら、彼はそれを読みました。日が経つにつれて、彼はしばしば極度の衰弱を感じると話しました。午後、彼は力を奮い起こして、枕を直し、姉が手伝おうとすると「気のすむようにさせておくれ」と申しましたが、姉を枕元に呼びよせてから、大きく荒い息をしながら眠りに落ちました。次第にその音は静かになり、ついに陽が沈むときのように、最期が安らかに苦痛もなく訪れました<sup>34)</sup>。

バジョットの死後、数年してロバート・ジフェン卿は次のように記した——

精神的には、バジヨットは死期の近づいた頃が最も充実し、『経済学研究』を完成し、その後、別の著作に取り組むなど何年にもわたる楽しい苦勞を期待していた。バジヨットの晩年の著作は、たまたま殆ど全て経済学に関するものであったが、年をとるにつれて経済学への熱が冷めたので、彼は一つの精神的段階を通過したにすぎず、それは通過されてしまえば、彼はまた政治経済学を閑却するであろうという印象を最後まで私に与えた<sup>86)</sup>。

彼の死で、ある鋭敏な精神と豊かな経験がその成熟した果実から奪われ、輝かしく、気高い生涯はその個性を最も花開かせたときに、突然、閉じてしまった。もし彼がもっと長生きをしていたなら、多くの点で人間の一生のうちで最も人間性があらわになる時期である老年に関して、興味深い一面を我々に提供してくれていたであろう。しかしながら、少しずつ老衰に向って行く、老いさらばえた老人のバジヨットを想像することは不可能である。節制と自制にもかかわらず、バジヨットの心の中には、若々しく大胆な気性、活気のある生活を愛する気持、短かい一生を避けがたくしたように思われる弱さへの憎悪があった。彼は最期の病にあっても敢然と危険を顧みず、シェリーのように激しくではないにしても（シェリーは暴風雨の中、愛用のヨットと運命を共にした：訳註）、自ら手を伸ばして死を選びとった。

## 〔原文註〕

- 1) *Essays and Addresses*, p. 133.
- 2) "Memoir of the Right Honourable James Wilson," iii. 302-305.
- 3) "Walter Bagehot," *Studies of a Biographer*, iii. 158.
- 4) Bagehot, "Sir George Cornewall Lewis," iv. 189.
- 5) Quoted by Mrs. Russell Barrington in *The Servant of All; Pages from the Family, Social, and Political Life of My Father*, ii. 137.
- 6) Quoted by Bagehot in "James Wilson", iii. 342.
- 7) Quoted by Mrs. Barrington, p. 17; Mrs. Barrington, p. 300.
- 8) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 385, 457-8.
- 9) Bagehot, "Pitt", iv. 35, 36.
- 10) Mrs. Barrington, p. 386.
- 11) P. 42.
- 12) 政治家としてのバジヨットに関する幾分謎めいたコメントが、A・パッチェット・マーティンによる A. Patchett Martin, *The Life and Letters of the Right Honourable Robert Lowe, Viscount Sherbrooke*, ii. 352 に記載されている。マーティンは以下のように記している

—しかしながら、彼〔バジョット〕は、文学者の性格に固有の、ペンが一人歩きするという一つの重大な欠点をもっていたように思われる。いずれにせよ、保守党員達がデイズレーリ個人の汚職に対する攻撃に解釈し、それで二つの悪のうち軽微なものを選択するという原則にのっとって、ロウ氏支持の決定を表明することとなったある言葉を、ハットン氏に宛た立候補声明書の中でバジョットは使用した。バジョット氏はこう書いている—「デイズレーリ氏は買収と汚職によって大多数の有権者が彼を応援するようになると本当に信じている。しかし、買収と汚職に基づく政府が英国において可能であるとは、私は信じない」。バジョットのように慎重で冷静な人間が、かくも大胆な意見を公にすることは意外な感がするが、あらゆる背徳の疑惑は常にバジョットの心に義憤を駆き立て、後年は特に、デイズレーリに対して辛辣な考えを抱いていたようである。

- 13) Pp. 41-2.
- 14) ix. 131.
- 15) *Political Economy Club; Minutes of Proceedings 1899-1920; Roll of Members and Questions Discussed 1821-1920*, pp. viii, ii, xvii, 351.
- 16) *Alfred Lord Tennyson, A Memoir by his Son*, ii. 167.
- 17) ii. 370-1.
- 18) "The Metaphysical Society," *Nineteenth Century*, xviii (August 1885), 177-196.
- 19) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 69-70, 378.
- 20) "Some Typical contributions of English Sociologists to Political Theory," *American Journal of Sociology*, xxvii (March 1922), 579.
- 21) Mrs. Barrington, p. 404.
- 22) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 416, 418.
- 23) *Das Herz der Wirtschaft*, p. vii.
- 24) "Bagehot as an Economist," *Fortnightly Review*, n. s. xxvii. April (1880), 558.
- 25) P. 451.
- 26) *Athenaeum, Rules and Regulations* (1874), p. 9.
- 27) Lord Morley, *Recollections*, i. 87.
- 28) Quoted by Mrs. Barrington, p. 35.
- 29) i. 193; "Pitt," iv. 7.
- 30) Quoted by Hutton, pp. 44-5, 43.
- 31) Bagehot, "Pitt," iv. 7.
- 32) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 395, 367.
- 33) Pp. 377, 442-3.
- 34) Mrs. Barrington, pp. 453-4.
- 35) Giffen, "Bagehot as an Economist," *Fortnightly Review*, n. s. xxvii (April, 1880), 567.